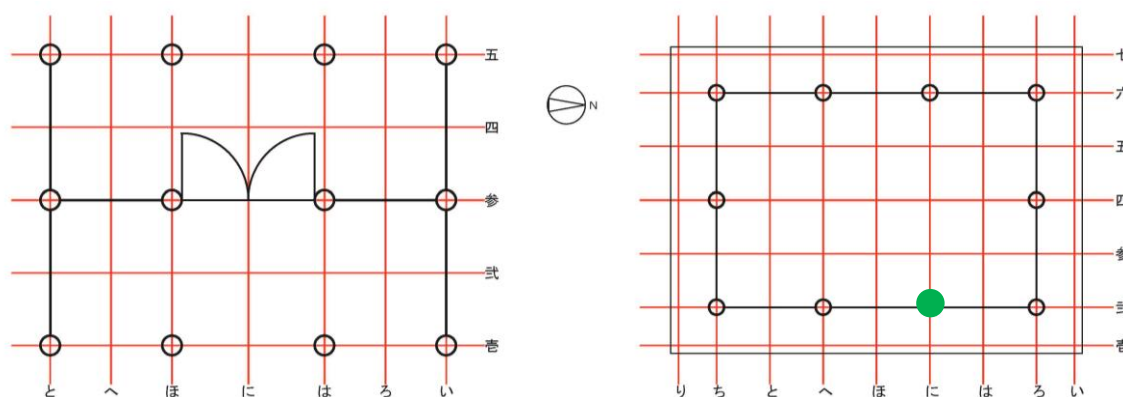


## 修理工事こぼれ話② 解体番付と番付札

文化財建造物の修理では、部材は元の位置に戻すこととなりますので、解体時にどこから解体した部材か目印をつけておかなければなりません。そのために、「解体番付」というものを定め、部材1つ1つに「番付札」をつけていきます。

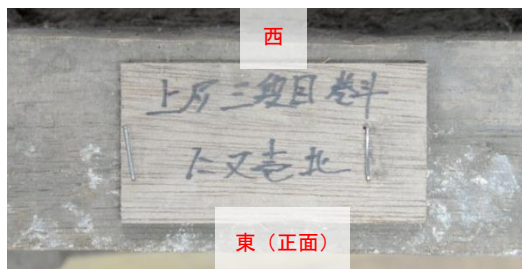
今回は、その解体番付と番付札について紹介します。

- ①**解体番付** その建物内における部材の住所といえるものです。今回の楼門工事では、柱の通りを基準として、1階と2階でそれぞれグリッド状の組合せ番付を定めました。組物など細かい部材が重なっている部分は、複雑な番付になってしまいます。

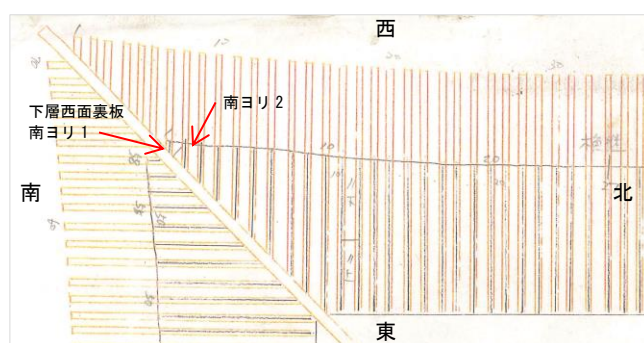


楼門の解体番付 左が1階の番付、右が2階の番付  
2階番付の図の緑色の柱の番付は「上層に武」となります

- ②**番付札** 解体番付を書き込み、部材につける板です。どの面が正面（阿蘇神社の場合は東面）なのかわかるように取り付けます。また、平面方向に長い部材には端部にそれぞれつけて向きがわかるようにします。



←グリッドの間の部材には「又」を使います  
正面から見て文字の向きが正になるよう取り付け  
どちらが正面なのかわかるようにしてあります



←垂木や化粧裏板などは東端・南端から何番目という番付にしています  
図面を用意し、上図のようにその番付を書き込んでおきます

解体される部材1つ1つに番付を決めて番付札をつける作業を、大工さんの知恵や手を借りながら行っています。

番付を決めたら、上図のように図面に書き込んでおき、組み立て時にその図面と番付札を照合しながら組み立てていくことになります。

組立後は、番付札は不用となりますので取り外します。一時的なものですが、重要な役割を担うものです。

(石田 陽是)